護国寺の寺報

その想い

第１４号
発行人：谷泰智
Ｒ２年８月８日発行

☆今こそ、一切皆苦に学ぶ

梅雨が明け、一斉に暑さが押し寄せてきたような今年の夏ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。先ずは、久方ぶりの寺報になってしまいましたことをお詫び申し上げます。私事で恐縮ですが、令和の始まりからついこの間までは、もがくことの多い辛い時期でした。けれども、周囲の支えや離れていても励ましの想いを送って下さる檀家様方のお蔭で、私なりになんとか踏ん張ることができ、今こうしてまた寺報をお届けする運びとなりました。今この瞬間、この寺報にお目通し下さっている全ての皆様方に改めて感謝申し上げます。

さて、もううんざりするほど続いているコロナ禍ですが、残念ながらこれは誰にとっても避けて通れる問題ではありません。ご自身の心配はもとより、皆様一人一人にとって大切な方々の生命を脅かす不安に苛まれている方々、さらにはこの厄災に関連して経済的に非常に厳しい局面の中奮闘しておられる方々、皆様の心身にのしかかる疲労は如何ばかりかと察します。

そこで、こんな困難な世相の時だからこそ、お釈迦様の教えを少しでも活用していただけるように、仏教の根幹をなす四法印の一つである『一切皆苦（いっさいかいく）』について、皆様にお伝えさせていただきます。

これは字のとおり、「一切は皆苦（みなくる）しみである」とするお釈迦様の教えです。しかしながらそう一方的に断言されても、我々にはたくさんの喜びがあることも事実です。それぞれの大切な人達との営みは基より、お仕事や趣味における遣り甲斐、未来への希望など・・・。私でさえ寧ろ一切皆楽と言えるのではないかと思ってしまうくらいです。

結論から申しますと、「全ては苦しみ」というこの言葉の本意には、実は「全てが愛おしいものであるからこそ」という大前提が下敷きされているのです。つまり、現在目に見えて、しかも感覚として受容できる苦しみに限らず、そもそも我々は何かを愛おしいと思っているからこそ、その何かは様々な機縁によって全て瞬時に苦しみに変わってしまう惧（おそ）れを孕んでいるということなのです。

ある識者は「コロナは我々の社会の脆弱（ぜいじゃく）さを露呈させた。」と述べられていましたが、仏教的な見方をすれば、その脆弱さあってこその我々人間なのです。つまり、合理的に全てを割り切ってなんでも個人主義でチャチャッと前へと進めないのは、我々が無意識に具えている他者への想像力、言い換えれば仏教的な慈愛があるからこそなのです。

ですから、今多くの人々が己の一挙手一投足の運び方に悩み社会不安が広がっていますが、それは正に今まで一切皆楽に見えていたものがコロっと顔を苦に変えたというようなもので、仏教で娑婆（シャバ）と呼ばれるこの世界の実相は、初めからそのような頼りないものがあたかも確固たる安心のように見えていたということなのです。

しかしそれを悲観する必要はありません。お釈迦様曰く「人は行いによってそうなるのだ。」という金言に倣えば、今だからこそ我々は自身を拠り所とし、より一層己の心身を整える時に在るのです

それは今まで以上に労力を払う生き方ではありません。少々逆説的ですが、不安があってこそ当たり前という安心を再確認するだけで自ずと昨今の世相にも慣れてくることができます。決して社会の何かが壊れたわけではなく、世の実相が少しだけ見えやすくなったのだと、どうか前向きに捉え直していただき、我々にできる『行いの力』をお互いに一層信じて参りましょう。

☆高知県佛教会５０周年事業のご報告

早や半年近く前のことになりますが、上記の事業に理事の一人として携わらせていただきました。

今年の漢字で高名な京都清水寺貫主森清範師の講演会の手前に、宗派を超えた式衆４０名で記念法要を開きました。会場が一体となって各宗派の御本尊の宝号や念仏や題目を唱和することができ、非常に感慨深い法要でした。

（画像の一番右の山伏姿が私です。→）

立50周年で記念法要
知県佛教会「法輪」本尊に各宗派
30カ寺でつ で設立50周年記念法要を 念講演し
仏教会は2月 営んだ。北法相宗大本山 法要は
市内のホール 清水寺の森清範貫主が記 まり、会
曹洞宗元 導師に各 が出仕。 シンボル 「法輪」 映し、本 般若心経 傷）を読 牟尼仏、 薩、南無 大師遍照 蓮華経と る宝号・ が唱えら

ーンに映された「法輪」を本尊に見立て、般若心
宗派の宝号・名号・題目などが唱えられた

回りて向かう　 　霊（れい）ってなんだろう？

「あなたは霊の存在を信じますか？」、「私、実は霊感が強いのよ。」、「あの仏像からは凄まじい霊性が放たれている！」などなど、『霊』という名のつく話題で盛り上がるという経験、実際のところ皆さんの日常にもよくあることなのではないでしょうか？

実は、この霊という言葉には似たようで微妙な違いがある３つの意味の捉え方があります。今回は、普段なかなか面と向かって切り出せない霊の話題について、一般的な仏教の観点と、あくまでも私の個人的な哲学とを交えながら述べていきます。以下の拙文が皆さんの供養の気持をより高める一助となれれば幸いです。

① 幽霊（お化け）としての霊

「坊さんって幽霊とか見えるが？」、この質問を受けることは今でもよくあります。率直に言いますと、私に限って言えば、幸か不幸か私には幽霊は見えません。では他の坊さんはどうなのかと問えば、私の知る範囲で幽霊が見えるという坊さんは、分母を本宗の僧侶でざっくり１００人位として、その内の１０人位というのが実情です。そして意外なことに、この割合でも恐らく他の宗派よりも多い方なのです。つまりは、現代のほとんどの坊さんは幽霊が見えないというのが実情です。

そもそも幽霊とは何なのかという定義が抜けていましたが、ここでは俗にいうお化け的に怖れられ、且つ奇妙で人型のものを幽霊とするならば、原始経典や大乗経典に於いてその存在は認められません。

ですから、いわゆる地縛霊や怨霊などという概念は仏教には存在せず、それらは古来の神道や民間信仰の中にあった、人々が持つ素朴な畏れがマイナスに働いたものだと私個人は考えています。しかし、見えるものは見えるのだから仕方がないというのが実際のところでしょうから、私は幽霊の存在を否定はしていません。むしろ私にも幽霊が見えた方がもっと世界に彩りが足されて毎日の刺激が増えるだろうと思うのですが、生まれつき幽霊が見えてしまって真剣に悩んでいる人もおられるでしょうから、そのような発言は慎まなければならないのかもしれません。

そこで、皆さんに考えてもらいたいのは、人間の認知に普遍性は存在しないということです。この世のあらゆる事象は、あくまでも結果的に多数派によって秩序付けられてきたので、古今東西で例外はたくさんあって当然なのです。霊感なども、一方では芸術的感性として昇華されてアウトプットされ、やがては世間から拍手を持って向かえられる場合もあれば、個人の意識の範疇の中で鬱々と纏（まと）わり続けることもあるでしょう。もし、それが如何とも辛いと感じる時は、いつでも私にご相談下さい。ただただ傾聴することはもちろん、いろいろなアプローチや仏教からの智慧を提供させていただきます。

② 霊魂（スピリット）としての霊

①で予想以上に字数を使ってしまいましたので、ここはズバっと申し上げたいと思います。霊魂とは実は我々のことなのです。正確に言うと我々の存在自体が霊魂なのです。もっと踏み込んで言うと、我々人間の本質は意識に他ならず、この「私が在る」とする証明不可能な意識こそ霊魂の働きに依るものです。（＊魂が輪廻転生するという説とはまた違う趣で述べています。）

けれども、霊魂と肉体、つまり意識と肉体の二元論で世界は認識されるべきではなく、自我とも呼べる意識があらゆる物質を認識し、そして言語が用いられることによって此の世は在るのです。元来の仏教ではこの自我を非我として捉えることで、小さな個としての認識を超越してより大きな何ものかと一つになろうと修行者たちは試み続けてきました。その境地がいわゆる悟りとか涅槃と呼ばれるものです。アメリカンインディアン達が言うところのグレートスピリットとは正に仏教で言うところの大我であり、５０回忌が終わると神様になるとか祖霊と融合するという思想も正にこれと同じです。

③ 霊性（れいせい）（神性（しんせい））としての霊

さて、最後の余白になってしまいましたが、この霊性（神性）が実は我々にとって一番無くてはならない大切なもので、これはつまり感動のことです。感動はあらゆるものに宿り、媒介し、何かを伝えます。霊性の重要な点は、この世の物理法則や常識を超越して我々に訴えかけてくることに尽きるでしょう。それはつまり、皆さんが日々与えたり与えられたりしている愛情や信頼や情熱から生まれ、やがては誰かに何がしかの感動を必ず与えます。そしてその感動は機械には決して真似できません。繰り返しますが、感動こそが人間が霊魂であるが故に持つ霊性であり敬われるべき神性そのものなのです。

✦檀家さんに聞く

地元の檀家様はよくご存じの国道３３号から県道２９７号入るT字路の交差点。正にその角に面する正岡石油店は、昭和３７年１０月から現在に至るまでの５８年間に亘り、ずっと営業を続けられています。

今回はこのスタンドの３代目である正岡隆憲（タカノリ）さんにお話を伺ってきました。思えば、隆憲さんの祖父母になられる実さんと多鶴子さんがまだ御健在だった頃、当時私は覚束ない歩きの小学校低学年、この交差点を横断する際、いつもお二人が気にかけて助けて下さり、大変お世話になったことを今でも憶えています。

＊（この記事は去年の２月に取材撮影させていただいたものをベースに、今年の７月中旬に再度取材撮影させてもらった分を合わせて構成しています。）

「あー、これはタイヤがいかん！　いつバリバリッて破れてもおかしくないねぇ。」（ちょうど足回りの不調でお客さんが駆け込んで来られたところでした。）

交差点はラッシュ時特に込み合います。お店への出入りには十二分の注意を！

隆　このスタンドはお祖父さんが昭和３７年１０月から始めたがよ。昔まだあんまり車が走りやせん頃からやりよったみたい。

坊　隆憲さんも修業時代とかがあるがですか？

隆　最初は２年くらい高知市内のスタンドに奉公みたいに入って、成人してから直ぐに帰って来て店を継いで早や２４年にもなるねぇ。

坊　スタンドについて意外と知られてないことを教えてもらえますか？

隆　そうやねぇ、以前は場所によって値段の違いが大きかったりしたけど、今は売値そのものはたいして変わらんき、それぞれの店がどう工夫して売るかよねぇ。結局、隣より安く売ろうとするき安売り合戦があちこちで始まるみたいな感じやね。　因みに、前は昭和シェルに所属しちょったんやけど、今はプライベートブランドでやりゆう。まぁ僕らが買う油そのものはどこで買うても値段一緒やきね。(笑)

坊　やっぱり夏は特に大変ですよね？　給油以外のこともありますか？

隆　そうやねぇ、全部屋根で覆われちゅうわけじゃないき上からも下からも熱いわねぇ。(笑)　特に火曜と土曜はスタンプカードのポイント２倍やきかなり忙しいねぇ。逆に冬は灯油の配達がけっこうあって、地元以外にも佐川の町や日下の沖名からも呼んでもらいゆう。給油に関してはやっぱり、通勤の行き帰りのついでに利用されるお客さんが多いねぇ。でも暇なときは１時間ぐらい１台も入らんときもあるけど。でも、そんな時にタンクローリーに来てもらえたら助かるけどね。意外にたくさん消費されよって、週に２回、ばらつきがあるけど１回に１０ｋℓ～１６ｋℓぐらい地下に補給されゆうで。

＊定休日は毎週日曜
＊クロネコヤマトの集配所も兼ねてます！

坊　やりがいとかアピールしたいこは？

隆　やっぱり、お客さんがバタバタッと賑やかに入ってくれて一日全部終わった後の達成感かな。　あと、やり始めた頃から僕は作業がしたかったき、４年前からガレージを増設して、そこでオイルとタイヤの交換にも力をいれゆう。　お陰様で給油だけでも忙しいがやけど、空いた時間にできるオイルとタイヤの交換がもうちょっとだけ増えてくれたら嬉しいかも・・・(笑)

番猫のミーちゃん。　配達にも同行するようですが、夏場は屋内でのお昼寝が仕事です。

お経のことば

六波羅蜜（ロクハラミツ）の解説　その３

精進波羅蜜（ショウジン　ハラミツ）　禅定波羅蜜（ゼンジョウ　ハラミツ）

今回は六波羅蜜の中の４番目と５番目の波羅蜜を紹介いたします。

精進とは、仏教辞典には「善を行い、悪を断つことを継続的に行うこと」とある通り、努力を継続していくことであるのは皆さんもよくご承知だと思います。正にその通りでそれ以上の御託を並べる必要は本来無いわけですが、敢えて私なりの解釈を付け加えるとすると、「その努力の方向性は果たしてどうなのか？」という自問が重要かと思われます。

もちろん、その方向性ばかりに捉われていては何も始まらず、「口より実行」とはよく言われる事ですが、それでも心のコンパスなるものを何度も見直しながら目標に向って歩み、且つしっかりと方向のブレを修正していかなければ、気づいた頃には思わぬ場所で迷子になっているかもしれません。

また、迷子にはならず目標地点にもちゃんと辿り着いたのに、なんだかしっくりこない。つまり「自分は確かに努力してきた筈なのに、なぜ相応の結果が得られていないのか？」という疑問。それらは人生ではよくあることとして、また「人生なんてそんなもの」として、安易にやり過ごされてはいないでしょうか？　確かに執着を捨てて吹っ切るということも時には大事な事ですが、努力の方向性や『取り組み方は果たしてどうだったのか？』という自問を以て今一度よく省みた上で、自分で納得して諦めるのと、そうではないのとでは同じ諦めでも雲泥の差が出てきます。

出発の場所からコンパスを何度も確かめながらちゃんと目標の場所には辿り着いたものの、なんだか虚しくてしっくりこない・・・。その原因に思いを巡らすと、もしかするとその道すがら大きな山や谷を見過ごしてはいなかったでしょうか？　またはあまりにも最短距離にこだわり過ぎて、ちょっとした遠回りさえ厭（いと）うてしまった可能性はないでしょうか？　もしかすると、その山や谷や遠回りの道には、目標の場所に辿り着くこと以上の価値を持った未知の宝物があったかもしれません。

頑張るという言葉は聞こえは良いですが、元の意味は眼を張る、つまり自分の我を曲げないという意味だそうです。誰にとってもこの世は既知よりも未知のもので溢れているのですから、少し肩の力を抜いた精進は大事な宝物を見落とさないという意味では、有効と言えるかもしれません。

さて、上で申し上げたようなことは、一見すると禅定の中で閃くようにも思えますが、禅定とは考えることではありません。そして禅定をわかりやすく言い換えた瞑想も、もちろん思考することではありません。では、無になればいいのか？と問われればそうでもないのです。こう言うとなんだか言葉遊びで煙に巻くように聞こえますが、「無になる」という思考の延長には、どこまで行っても「無になる」が有るだけです。敢えて極端な言い方をすると、禅定の本質は禅定そのものに他なりません。

例えば、具という中心の無い塩おにぎりをイメージした時、その塩おにぎりの本質とはどこにあるのでしょうか？つまり、塩おにぎりの本質は塩おにぎりそのものであり、同じように禅定の本質はそこから言葉が足されたり形容された何物かではないのです。無になるのではなく只（ただ）、瞑想に没入してみましょう。引用するのは畏れ多いですが、日本曹洞宗の開祖道元禅師も『只管打坐（しかんたざ）』（ただひたすらの坐禅）という格言を残されています。何だか先程の精進波羅蜜と矛盾するようにも思えますが、このようなダイナミックなバランスを以て、波羅蜜の実践は６番目の般若（はんにゃ）波羅蜜へと到るのです。

楽しい行事案内

９月２２日（火）祝日
秋の彼岸会・千体流し

毎月２８日の９時と３時から
本堂にて柱源護摩供養

本山修験宗　大瀧山護国寺
７８１－２１５５
高知県高岡郡日高村九頭２９１
☎　０８８９－２４－７２４
ホームページ
gokokuji.site